サハ語の多回接辞 (iterative) の多機能性 *

江畑 冬生（新潟大学）

1. はじめに

サハ語の多回接辞 (iterative) は多機能性を持っている．単に「複数回の動作」を表すと捉えるのは適切とは言えない．多回接辞の多様な意味は，主語の単複，目的語の有無と単複，否定接辞の有無，動詞の語彙的意味などに依る．同系言語との対照からも多回接辞の多機能性は際立っており，むしろ近隣の異系統の言語に見られる意味拡張志向に共通する点がある．

2. 多回接辞の形態とその起源（発表では省略）

多回接辞は，動詞語幹に付加して新たな動詞を生む派生接辞である．多回接辞には，音韻的条件からは予測不可能な多くの異形態がある（同じ動詞に別の異形態が自由変異で付加しうることもある）．母音語幹動詞に付加する場合，語幹末の長母音が短母音に交替する（これは他の動詞派生でも見られる交替である）．

［表 1］ 多回接辞の主な異形態

異形態	語幹の条件	語例
-(i)telee	子音語幹・母音脱落語幹	buol-utalaa「なる」，körs-ütelee「会う(körüs)」
	母音語幹	ïta-talaa「泣く(ïtaa)」，toxto-toloo「止まる(toxtoo)」
-telee	語幹末が/r, l, y/ [1]	bier-telee「与える」，suuy-talaa「洗う」
-ielee	子音語幹（単音節語）	teb-ielee「蹴る」，ït-ïalaa「撃つ」
-elee	使役接辞 -(i)t の後など	alžat-alaa「壊す」，ergit-elee「回す」
-tee	使役接辞 -er の後など	ölör-töö「殺す」，tüher-tee「落とす」

Xaritonov (1960: 23-25) や Ubrjatova (1982: 277) などのロシアの先行研究では，多回接辞-(i)telee ないし-telee の由来を*-te*（古い段階の複数接辞*-t* に遡る形式）＋*-lee*（出名動詞派生接辞）の結合と考えている．しかしこの説明には，3 つの点で問題がある： ①動詞語幹に名詞の複数性を表す形態素が付加する点が不自然. ②/t/から/te/への変化を説明する必要性．③異形態-ielee が/t/を含まないこと．

発表者は，同系のトゥバ語の多回接辞*-gile* からの二通りの音変化を提案する．すなわち一方では/g/から歯茎音への変化により-(i)telee ないし-telee が生じ, 他方では/g/脱落と

* 本研究は，科研費（課題番号 20H01258, 21H04346, 22H00657）の支援を受けたものである．出典が明記されていないサハ語の例文は，発表者によるフィールドワークまたは発表者の作成したコーパス資料からの例である．グロス付与の詳細ルールに関しては，江畑・Akmatalieva (2022: 8-10) の方針に従うものとする．本発表は「チュルク諸語勉強会」（2024 年 6 月 21 日）での拙論に基づくものであり，菱山湧人氏をはじめとする参加者からの多くのコメントに感謝申し上げる．

[1] 語幹末に/l/を持つ語でこの異形態が付加するのは，管見の限りでは *aʁal-talaa*「持ってくる」に限られ，しかも *aʁal-taa* という自由変異形も見られる．

母音の代償延長により-ielee が生じたものと見る（サハ語では母音語幹動詞は必ず長母音を持つので，いずれにしても接辞末母音の長母音化が生じるはずである）[2]．同様の二通りの音変化は，使役接辞の異形態の 1 つ-*gis* からも仮定できる[3]．

［表 2］ 使役接辞の異形態における対応

	トゥバ語	サハ語
/g/から歯茎音	kör-güs「見せる」	kör-dör「見せる」
/g/脱落と代償延長	tur-gus「立てる」 er-gis「(氷を)解かす」	tur-uor「立てる」 ir-ier「(氷を)解かす」

3. 先行研究に基づく意味の概観と問題点（発表では省略）

多回性 (iterativity) を類型論的観点から扱った初期の研究の 1 つに Xrakovskij (1997) がある（ただし多回接辞に特化した研究ではない）[4]. Xrakovskij (1997: 27) では situational plurality のタイプとして Multiplicative（行為の複数），Distributive（動作対象の複数），Iterative（習慣）への分類を行っている．

近年の研究である Mattiola (2019) は，pluralactionality を plurality or multiplicity of the situations encoded by the verb のように定義する．やはり多回接辞に特化した研究ではないが，第 2 章の semantic domain に関する議論など参考になる部分が大きい．

Xaritonov (1947: 181-182) や Ubrjatova (1982: 276-277) などの参照文法には，サハ語の多回接辞の用法について説明がある．例えば Xaritonov (1947: 181) は，“Глаголы многократного вида выражают действие, совершаемое многократно или направленное на несколько предметов.”「多回体の動詞は，複数回遂行される行為ないし複数の対象に向けた行為を表す」と述べている．Xaritonov (1960: 12-37) は多回接辞の異形態や意味的特徴について詳しい記述を行うが，基本的特徴に関する記述はほぼ同様である．

たしかに多回接辞の典型的な用法は，(1)のような行為の複数性，(2)のような動作主の複数性，(3)のような動作対象の複数性を表すものだと言える．

---

[2] Anderson and Harrison (1999: 42) は，トゥバ語の多回接辞-*gile* の起源として動名詞接辞-*gi*＋出名動詞派生接辞-*le* の可能性を示している．発表者もこれに賛成する．動名詞接辞-*gi* は単独で用いられることはなく，向格接辞-*že* との結合により限界副動詞-*giže* を形成するか，後置詞 *deg* との組合せにより「～であるかのようだ」を表す一種のモダリティ形式を作る．一方で Böhtlingk (1851: 292-293) はサハ語の多回接辞に関して “Das eben erwähnte Affix ist, wie ich schon an einem andern Orte wahrscheinlich zu machen gesucht habe, zusammengesetzt aus dem Affix der Nomina actionis und dem Denominativaffix”「先の接辞は，私が他で試みたように，動名詞接辞と出名動詞接辞から構成されている」と述べている．（使役接辞との並行性への言及こそないが）結論的には発表者とほぼ同じであり，驚きを禁じ得ない．一方で Ščerbak (1981: 51) は，キルギス語における Batmanov (1940: 47) の説として -*кїn*（？）＋-*ler*（PL）を紹介しているが，音韻的にも機能的にも場当たり的であり説得力に欠ける．

[3] トゥバ語における使役接辞の異形態-*gis* は，5 つの動詞語幹にしか付加しない．これらのうち，サハ語に対応する動詞が存在するのは表 2 に示す 3 語のみである．なおトゥバ語の継起副動詞-*geš* とサハ語の即座副動詞-*eet* の間にも，/g/脱落と母音の代償延長という変化を仮定しうる．

[4] 同書所収でタタール語，ウズベク語，トファ語を扱った Nasilov, Isxakova and Rassadin (1997) でも，多回接辞に関する記述はわずかに留まる．

(1)　*xahïak-ka*　*suruy-**talaa**-bït-ïm*
　新聞-DAT　書く-**ITER**-PST-1SG
「私は新聞に何度も記事を書いた」

(2)　*ňirey-der*　*uhaa-batax-tar*　*emie*　*öl-**ütelee**-n*　*xaal-bït-tar*
　仔牛-PL　長くなる-NEG:R.PST-3PL　また　死ぬ-**ITER**-SEQ　残る-R.PST-3PL
「仔牛たちは長生きしなかった．また死んでしまった」

(3)　*xos-tor*　*aan-nar-ï-n*　*aňň-**ïtalaa**-n*　*kör-dü-m*
　部屋-PL　ドア-PL-POSS.3-ACC　開ける-**ITER**-SEQ　見る-N.PST-1SG
「私は部屋のドアを開けてみた」

多回接辞の用法の捉え方には，3 つの問題点がある．第 1 に，純粋に行為の複数性や動作主ないし動作対象の複数性を表す例ばかりでなく，プラスアルファの含意が加わった例が（先行研究が挙げるものを含め）多い．第 2 に，動作主の複数性は，主語に付加された複数接辞や述語に義務的に付加される主語の人称・数の標示により明らかである（サハ語では 3SG/3PL を義務的に区別するため）．動作主が複数であることを表すには相互共同接辞-(i)s も用いうるので，両者の棲み分けも問題となる．第 3 に，動作対象の複数性は，目的語に付加された複数接辞からも分かる．

本発表では，まずプラスアルファの含意に着目する．もちろん Xaritonov (1960: 12-37) をはじめとする先行研究にも例や説明は見られるが，類型論的観点から体系的に捉え，同系言語および近隣の言語との対照も行う．

4. （先行研究の）例文とコーパス調査から見る多機能性

サハ語の多回接辞は，(1)のような行為の複数性を表すのが基本であり，(2)のような動作主の複数性や(3)のような動作対象の複数性を表すこともある．これらを基本的な用法とすることは間違いないが，先行研究やコーパスから得られた例文には様々な含意が加わっているのが見て取れる．

4.1 自動詞に付加する場合

多回接辞が自動詞に付加する場合には，単に行為の複数性や動作主の複数性を表すだけでなく，以下のような含意を持つ例がある．

まず行為の複数性に関連して，多回接辞が**反復行為**を表すものがある．この含意は特に移動動詞に見られるもので，Ubrjatova (1982: 276) にも *xaam-ïtalaa*「行ったり来たりする」（< *xaamp*「歩く」）の例がある．(5)も「入っては出る」を繰り返すことになるので反復行為に含めておく．

(4) *kusčut-tar* *üöhee* *allaraa* *bar-**ïtalaa**-bït-tara*
鴨猟師-PL 上 下 行く-**ITER**-PST-3PL
「鴨猟師たちは，［川沿いを］上下に行ったり来たりした」

(5) *ol* *bïïh-ï-gar* *miexe* *araas* *sanaa-lar* *kiir-en*
その 間-POSS.3SG-DAT 1SG:DAT 様々な 考え-PL 入る-SEQ
*taxs-**ïtalaa**-tï-lar*
出る-**ITER**-N.PST-3PL
「その間に，私には色々な考えが入って出た」

動作主の複数性に関しては，「次々に」「各自が」などの含意がよく見られる（**動作主の個別性**と呼ぶ）．逆に言えば，複数の動作主の同時連携を含意することは稀である．

(6) *iti* *kem-ŋe* *žon* *biir-dii-lee-n* *serii-tten*
その 時-DAT 人々 1-ずつ-VBLZ-SEQ 戦争-ABL
*kel-**itelee**-n* *bar-dï-lar*
来る-**ITER**-SEQ 行く-N.PST-3PL
「その当時，人々は 1 人ずつ戦争から戻り始めた」

(7) *barï* *onno* *manna* *naada-larï-gar* *bar-**ïtalaa**-bït-tar*
みな あそこ ここ 必要-POSS.3PL-DAT 行く-**ITER**-R.PST-3PL
「みな，あちこち必要な所に行った」

(8)では，出来事が様々な要因によることを含意する．これも動作主の個別性の 1 つの反映であると見たい．

(8) *kim* *ülüy-en* *kim* *ïalž-an* *otton* *üksü-lere*
誰 凍傷になる-SEQ 誰 病気になる-SEQ 一方 多く-POSS.3PL
oburgu *oʁo-lor-ton* *kïrban-an* *öl-**ütelee**-ti-ler*
大柄な 子-PL-ABL 殴られる-SEQ 死ぬ-**ITER**-N.PST-3PL
「一部は凍傷で一部は病気で，一方で大半は大柄な子供たちから殴られて死んだ」

次に，**場所の複数性**を表す例がある．(9)(10)は「様々な場所に」を表し，(11)は「様々な場所から」を表す．

(9) *nehielek-ter* *aayï* *saŋa* *oskuola-lar* *tut-ull-**utalaa**-bït-tara*
村-PL ごと 新しい 学校-PL 建てる-PASS-**ITER**-PST-3PL
「村ごとに新しい学校が建てられた」

(10) *urukku* *žïl-lar-ga* *bultuu-r* *alaas-tar-bïtï-gar*
昔の 年-PL-DAT 狩る-PRS アラース-PL-POSS.1PL-DAT
*sïlž-**ïtalaa**-tï-bït =da* *xanna* *daʁanï* *uu* *taxsï-batax*
いる-**ITER**-N.PST-1PL＝も どこに も 水 出る-NEG:R.PST:3SG
「以前に私たちが狩りをしていたアラース（凹んだ皿状の草地）に行ったが，どこにも水は出ていなかった」

(11) *kuorat* *oskuola-larï-ttan* *uluus-tar-tan* *emie* *kel-**itelee**-bit-ter*
町 学校-POSS.3PL-ABL 地方-PL-ABL また 来る-**ITER**-R.PST-3PL
「[子供たちは] 町の学校や各地方からも来ていた」

意味的には場所の複数性に似ているが，以下のような例は**大きな全体の中の各部分**を表すものと考える．「大きな全体」が主語として単数形で現れる．

(12) *xonuu* *xaraar-**talaa**-bït*
草原 黒くなる-**ITER**-R.PST:3SG
「草原のあちこちが（雪が解けて地面が露出して）黒くなった」
‘поле почернело в отдельных местах (появились проталинки)’［Xaritonov (1960: 21)］

(13) *balaʁan* *ih-e* *kihi* *sïlžï-bataʁ-a* *ïraap-pït-a*
冬住居 中-POSS.3SG 人 いる-NEG:PST-3SG 遠くなる-PST-3SG
bill-er *onon* *manan* *sïbaʁ-a* *tüh-**ütelee**-bit*
分かる-PRS:3SG あそこで ここで 漆喰-POSS.3SG 落ちる-**ITER**-R.PST:3SG
「家の中は人が住まなくなって久しいのが分かる．あちこちで漆喰が剥げていた」

4.2 他動詞に付加する場合

多回接辞が他動詞に付加する場合には，単に行為の複数性や動作主ないし動作対象の複数性を表すだけでなく，以下のような含意を持つ例がある．

まず，動作対象が複数であることを予告するような例がある．この例では多回接辞の付加した動詞一語が文となっており，目的語の数を標示するかのようでもある．この例は動作対象の複数性を際立たせているものと見ておく．

(14) *sïlaŋ* *dien* *toponim-nar* *balayda* *kieŋnik* *tarʁam-mït-tar*
PLN という 地名-PL かなり 広く 広がる-R.PST-3PL
*kör-**ütelie**-ʁïŋ*
見る-**ITER**-IMP.1PL
「Сылан という地名はかなり広く分布している．［以下の諸例を］見ましょう」

次に複数の動作対象に対し「1 つ残さず」を表す例がある．**動作対象の全数性**と呼ぶ．

(15) *čaaskï-lar-ï* *suuy-**talaa***
コップ-PL-ACC 洗う-**ITER**(IMP.2SG)
「コップを全部（1 つ残さず）洗え」 ‘перемой чашки’ (все, без исключения)
［Xaritonov (1960: 21)］

(16) *ïnax-tar-ï* *tahaar-**talaa**-tï-lar*
牛-PL-ACC 出す-**ITER**-N.PST-3PL
「彼(女)らはすべての牛を小屋から出した」 ‘коров повыпускали’ (постепенно всех)
［Xaritonov (1960: 21)］

動作対象への影響度が強いことを表す例もある．この含意は動作対象の物理的変化を表す動詞に見られる．

(17) *et-i* *bïs-**talaa***
肉-ACC 切る-**ITER**(IMP.2SG)
「肉を細かく刻め」 ‘разрезай мясо’ (на куски) ［Xaritonov (1960: 21)］

(18) *bu* *mah-ï* *xayït-**alaa***
この 木-ACC 割る-**ITER**(IMP.2SG)
「この木を細かく割れ」 ‘расколи это дерево’ (на части) ［Xaritonov (1960: 21)］

他動詞でも，**場所の複数性**を表す例がある（ただし(19)は大きな全体の大きな全体の中の各部分と見なせるかもしれない．「大きな全体」は目的語として現れている）．

(19) *ol* *uol* *miigin* *suturug-unan* *sirey-ge* *oyoвos-ko*
その 男の子 1SG:ACC 拳-INST 顔-DAT 脇腹-DAT
*oxs-**utalaa**-bït-a*
打つ-**ITER**-PST-3SG
「その男の子は拳で私の顔と腹を殴った」

(20) ГАИ үлэһиттэрэ бу сырыыга тоҕо эрэ итирик туруктаах оҕолорго итэҕэйбиттэр, дьиҥнээх хаһаайын кимин быһаара барбатахтар. Быһата, «документуоҥҥутун сарсын аҕалаарыҥ» диэн баран дьиэлэригэр **ыыталаабыттар**.
「交通警察官たちは今回なぜか，酔った状態の子供たちを信じた．本当の首謀者は誰なのかを調べに行かなかった．つまり『身分証を明日持ってこい』と言って彼らを家に帰らせた」

4.3 動作の受け手の複数性

多回接辞が動作の**受け手の複数性**を含意する例がある．動作の受け手は，与格名詞句として明示的に現れる場合も，文中には現れずに文脈から理解される場合もある．この

用法は広義の授受動詞に見られる.

(21) *vasilij ivanovič* *arïgï* *kut-**utalaa**-ta*
（人名） 酒 注ぐ-**ITER**-N.PST:3SG
「ワシリー・イワノヴィチは酒を［みんなに］注いだ」

(22) *dokumuon-nar-gï-n* *xas* *daʁanï* *baʁar-bït* *üöreʁ-iŋ*
書類-PL-POSS.2SG-ACC いくつ も 望む-PST 教育-2SG
terilte-ler-i-ger *ïït-**alaa**-n*
組織-PL-POSS.3SG-DAT 送る-**ITER**-SEQ
「書類をいくつも君が志望する教育機関に送って…」

(23) *kim-i* *daʁanï* *min* *žie-ber* *killer-ime-ŋ*
誰-ACC も 1SG 家-POSS.1SG:DAT 入れる-NEG:IMP-2PL
dien *čugas* *žon-u-gar* *et-**itelee**-bit*
と 近い 人-POSS.3SG-DAT 言う-**ITER**-R.PST:3SG
「彼(女)は『誰も私の家に入れるな！』と近くの人々に言った」

4.4 因数分解式構造への拡張

多回接辞の用法拡張の 1 つとして, 複数の個別的な出来事を 1 つの述語動詞が一括する場合（**因数分解式構造**と呼ぶ）がある．まずは自動詞を用いた因数分解式構造の例を示す（本節では煩雑さを避けるためサハ語原文と日本語訳文のみを示す).

(24) Бу иһиттэргэ маарынныыр үрүҥ, ардыгар кыһыл көмүстэн оҥоһуллубут иһиттэр Хакасияҕа, Арҕаанҥы Тываҕа уонна ордук хойуутук Хайалаах Алтайга, барыта түүрдэр олорбут сирдэринэн, **көстүтэлээбиттэрэ**.
「これらの食器に似る，銀で（所々は金で）作られた食器は，ハカシアおよび西部トゥバで，さらに多くはゴルノ=アルタイスクで，すべてチュルク民族が住んだ土地で，見つかった」

(25) Кини, дьиҥ чахчы, официальнай күрэхтэһиигэ — 1935 с. ыытыллыбыт Бүтүн Саха сирин II спартакиадатыгар кылыыга аатырбыт кынаттаах кылыыһыт Дмитрий Босиков уонна Г. Макаров кэннилэриттэн — үһүс, ыстаҥаҕа Босиков кэнниттэн — иккис, куобахха Марковка хотторон эмиэ иккис миэстэ **буолуталаабыта.**
「彼は（中略）1935 年に開催された第 2 回全サハ共和国体育大会で，片足跳躍において（中略）D.ボシコフと G.マカロフに次いで 3 位, 跳躍においてボシコフに次いで 2 位, ウサギ跳びにおいてマルコフカに負けこれも 2 位になった」

(26)　Холобур, 2005 с. Майатааҕы спартакиадаҕа атах оонньуутугар 9-с миэстэ, 2006 с. Сунтаарга 10-с, хапсаҕайга 15-с, саахымакка 2003 с. Хаандыгаҕа, 2006 с. Сунтаарга 9-с **буолуталаабыттар**.

「[ニュルバ地方はかつてスポーツで優秀だった］例えば，2005 年マヤでの体育大会ではラン競技で 9 位，2006 年スンタルでは 10 位，レスリングで 15 位，チェスでは 2003 年にハンドゥガで 2006 年にスンタルで 9 位になった」

(27)　сахалыы аат тэнийэ илигинэ, оҕолорбун Дьулустаан, Ньургустаан, Айаал, Сардаана диэн **ааттаталаабыппын** тыаҕа олорор убайым бэркиһээн

「サハ風の名前がまだ一般的でない時代に，私が子供たちをジュルスターン，ニュルグスターン，アヤール，サルダーナと名付けたのを田舎に住む兄が驚嘆して…」

次に他動詞を用いた因数分解式構造の例を示す．これらの例は，「A が B を X する」と「C が D を X する」を合わせた因数分解式構造である点で極めて興味深い．

(28)　Баир Укоев уонна Айаал Лазарев эр-биир З. Абдулманаповы, Иван Анисимовы уонна Алексей Егоровы, Алексей Николаевы **хотуталаан**, финалга быһаарыстылар.

「バイル・ウコエフとアヤール・ラザレフは，それぞれ Z.アブドゥルマナポフとイワン・アニシモフを，そしてアレクセイ・イゴロフとアレクセイ・ニコラエフを負かして，決勝で相まみえた」　［A と C は，それぞれ B1 と B2 を，D1 と D2 を負かした］

(29)　Закир Нуритдиновы (Чурапчы) уонна Дмитрий Шкарубоны (Нерюнгри) **хотуталаабыт** Мииринэй бөҕөстөрө Ян Петров уонна Прокопий Кириллин үһүс миэстэлэннилэр.

「ザキル・ヌリトディノフ（チュラプチュ）とドミトリー・シュカルボン（ネリュングリ）を負かしたミルヌイの選手たちヤン・ペトロフとプロコピー・キリリンが 3 位になった」　［B と D を負かした選手たち A と C］

発表者はヤクーツク市内の大学で，教授が学生にプリントを配布する際に，***iït-alaa-ŋ***（送る-**ITER**-IMP.2PL）と発言したのを聞いたことがある．これは「A が（自分の分を取って）B に渡し，B が C に渡し…」を意図したものであり，(28)(29)とは別のタイプの因数分解式構造である．

4.5 否定文における多回接辞

多回接辞の付加した動詞語幹に，否定接辞が後続することがある．理屈上では，否定すれば 1 回も多回も同じはずである[5]．コーパスでは，否定では動作主の複数性または動作対象の複数性を表す例のみが見つかる．

[5] Nasilov, Isxakova and Rassadin (1997: 217) ではタタール語に関して “No negative forms are possible” との記述がある．トゥバ語でも発表者が作成したコーパス上で否定接辞を伴う例は 1 つもない．

(30) *onnuk* *tübelte-ler* *taxs-**ïtalaa**-bat* *buol-but-tar*
そのよう 出来事-PL 出る-**ITER**-NEG なる-R.PST-3PL
「そのような出来事は生じなくなった」

(31) *oskuola-ʁa* *üören-e* *sïlž-an* *bu* *saahïr-bït* *žon-ü* *kïtta*
学校-DAT 学ぶ-SML いる-SEQ この 年取る-PST 人々-ACC と
ayax *at-an* *kepsep-pit-e* *dien* *suoʁ-a*
口 開く-SEQ 話す-PST-3SG という ない-POSS.3SG
onon *üčügeydik* *bil-**itelee**-bet*
それで よく 知る-**ITER**-NEG:3SG
「学校で勉強していて（学生時代に），この年を取った人々と口を開けて会話したということは無かった．そのため［彼らのことを］良く知らないのだ」

(32) *iti* *tüün-ü-ger* *soʁotox* *xaal-bït* *tihex* *börö* *xon-o*
その 晩-POSS.3SG-DAT 独り 残る-PST 最後 狼 泊まる-SML
sït-ar *üüteem-mit* *att-ï-gar* *kel-en* *kuhaʁan*
横になる-PRS 洞窟-POSS.1PL そば-POSS.3SG-DAT 来る-SEQ 悪い
baʁayïtïk *uluy-an* *ažas* *utut-**alaa**-bat-a*
とても 吠える-SEQ 全く 眠らせる-**ITER**-NEG:N.PST-3SG
「その晩にたった一匹残った最後の狼が，私たちが寝ている洞窟のそばに来てひどく吠えて，［私たちを］全く眠らせなかった」

5. 同系言語との対照（発表では大幅に簡素化）

同系の他のチュルク語の多くも，多回接辞を持つ．例えば Johanson (2021: 582) は “The widespread type {-GAlA} ~ {-GḮlA} ~ {-GlA} ~ {-(A)lA} forms verbs meaning ‘to do intensively/ frequently/repeatedly’ (Table 28.15)” と述べ，表に 9 つの言語の語例を挙げている[6]．しかし具体的例文から見ると，表しうる用法の範囲は一様ではないようだ．

まず北東語群のうちトゥバ語では，行為の複数性，動作主の複数性，動作対象の複数性を表す例が大半を占めるようである（発表者の作成したコーパスデータによる）．

(33) *komp’jutor-de* *at-**kïla**-ž-ïr* *oyun*
コンピュータ-LOC 撃つ-**ITER**-RECP-AOR 遊び
「コンピュータ上で何度も撃ち合うゲーム」

(34) *öl-gen* *kiži* *söök-ter-i* *čït-**kïla**-ar*
死ぬ-PST 人 骨-PL-POSS.3 横になる-**ITER**-AOR
「死んだ人の骨が（あちこちに）ある」

[6] Johanson (2022: 36) では，frequentativity を表す形式の 1 つとして多回接辞を位置づけている．

(35) *urug-lar* *čeček-ter* *tut-**kula**-an*
子-PL 花-PL つかむ-**ITER**-PST
「子供たちは花を受け取った」

多回接辞が行為の複数性を表すことは当然として別にすると，トゥバ語の多回接辞は**参与者多数性指向**である（動作主あるいは動作対象の複数性を表す傾向にある）と見なせる．ただし，反復行為や受け手の複数性を含意する例もわずかに見つかった[7].

(36) *čolaažï* *mašina-zï-n* *dolgandïr* *kïlašta-**gïla**-aš*
運転手 車-POSS.3-ACC 周り 歩く-**ITER**-SEQ
「運転手は車の周りを歩き回って…」

(37) *ayak-tar-da* *kut-**kula**-an* *ak* *süt*
カップ-PL-LOC 注ぐ-**ITER**-PST 白い ミルク
「［みんなの］カップに注がれた白いミルク」

ハカス語では，高島 (2024: 98) および Anderson (1998: 42) の例文は，行為の複数性，動作主の複数性，動作対象の複数性を表すものに限られている．

(38) *olʁan-nar* *tasxar* *oyna-**ʁla**-pča-lar*
子-PL 外で 遊ぶ-**ITER**-PRS-3PL
「子供たちが外で遊んでいる」 ［高島 (2024: 98)］

ショル語でも，Dyrenkova (1941: 148) の例文は，行為の複数性，動作主の複数性，動作対象の複数性を表すものに限られている．

(39) *kuš-tar* *kel-**gile**-pča-lar*
鳥-PL 来る-**ITER**-PRS-3PL
「鳥たちが（次々と）やってくる」 ［Dyrenkova (1941: 148)］

サハ語に最も言語特徴が近いと言えるドルガン語に関しては，Däbritz (2022: 536) が “necessarily more than one subject or more than one object is involved” と説明して次の例文などをあげている（例文表記およびグロスの一部は発表者の方式に改めた）[8]．ただし，

[7] Anderson and Harrison (1999: 42) は，多回接辞が “expressive actions (diminutive, augmentative)” を表すこともあるとするが，この説明に発表者は懐疑的である．なお同書は，クズル方言（標準語）話者において多回接辞の使用頻度は比較的低いとも述べている．トゥバ語と言語特徴が近いと言えるトファ語に関しては，Rassadin (1978: 152) にわずかな記述が見られるのみである．

[8] Däbritz (2022) は，行為の複数性を表す iterative (“suffixes -AlA:, -IAlA:, -A:ktA:, -ItAlA:, -AttA:, and -TA:”) と，動作主ないし動作対象の複数性を表す multiple subject/object (“suffixes -ItAlA:, -AttA: and -TA:”) を区別している．ここに引用した例はすべて後者とされる形式である．

受け手の複数性（*kut-attaa*「（各自に）注ぐ」＜ *kut*「注ぐ」）や動作対象への影響度（*bïh-ïtalaa*「（細かく）切る」＜ *bïs*「切る」）を表す例も散見される．

(40) *kötör-dör* *barï* *köt-**ütelee**-n* *kaal-bït-tar*
bird-PL all fly-**ITER**-SEQ stay-R.PST-3PL
「鳥たちはみな飛んでしまった」 ［Däbritz (2022: 315)］

北西語群を見ると，キルギス語に関して江畑・Akmatalieva (2022: 65) は「一部の動詞に限って用いられる」だけでなく「複数人に対する命令形式としての機能に特徴がある」点を指摘している．アクマタリエワ・大﨑 (2024: 92) は「命令形の 2 人称複数接尾辞」と呼んでいる．

(41) *kol-uŋar-dï* *taza* *žuu-**gula***
手-POSS.2PL-ACC きれいに 洗う-**ITER**(IMP.2SG)
「手をきれいに洗ってください」 ［江畑・Akmatalieva (2022: 66)］

アルタイ語（南方言）でも，Nevskaja (2017: 240-242) が挙げる例文には参与者多数性指向が窺える．Dedeeva (2016: 339) には，“аффикс **только множественного числа** и **второго, третъего лица**”「2 人称複数と 3 人称複数でのみ用いる接辞」との興味深い記述がある（太字は原文）．Dedeeva (2016: 340) には，多回接辞が 2 人称で軽蔑のニュアンス (уничижительный оттенок) を持つという指摘もある．なお Nevskaja (2017: 203) が挙げる *ayt*「話す」からの *ayt-kïla*「叱る」は，意味的に透明でない派生の例と言える．

(42) *bal-dar* *kapšay* *mïnaŋ* *bar-**gïla***
子-PL はやく ここから 行く-**ITER**(IMP.2SG)
「子供たち，はやくここから出て行け！」

つまりキルギス語とアルタイ語（南方言）でも多回接辞は参与者多数性指向であり，特に動作主の複数性を表す傾向が強い．

一方で同じく北西語群のタタール語について，Burbiel (2018: 804) は多回接辞の用法の 1 つに “A partial, superficial or incomplete execution of an action” という説明を与えているが，発表者の分類では反復行為や動作対象への影響度と呼べる例も見られる：йоргәләп ‘walking back and forth’, ерткаларга ‘tear to pieces’．菱山湧人氏の私信によれば，タタール語の多回接辞は生産的であり，先行研究では動作が不完全であることや散発的であることも表すと指摘されているという．

次にバシキール語でも，Dmitriev (1948: 196) はわずかな記述に留まるが，Poppe (1964: 71) には *bar-ʁïla-* ‘to walk to and fro’ という動作の反復の例が見つかる．菱山湧人氏の私信によれば，先行研究では動作の回数が少ないことも表すと指摘されているという．加えて動作対象の全数性，動作対象への影響度，受け手の複数性，動作の散発性を表す用例も見つかるという．

チュルク語の下位分類の中で特異な位置を占めるチュヴァシ語でも，菱山湧人氏の私信によれば，先行研究では動作の濃淡や動作の不完全性を表すと指摘されているという．加えて反復行為，動作対象の全数性，動作対象への影響度，受け手の複数性，動作の散発性を表す用例も見つかるという．

一方で他のチュルク語に関する研究では，多回接辞について詳しい記述がないことも多い： カザフ語（中嶋 2013: 64），トルクメン語（Clark 1998: 537），チャガタイ語（Bodrogligeti 2001: 163）. Lewis (2000: 151) によれば，トルコ語の多回接辞は，“no longer be regarded as a live suffix” であるという．

多回接辞について特に記述が見られないことも多い：ガガウズ語（Pokrovskaja 1964），アゼルバイジャン語（松長 1999，吉村・グリエヴァ 2023），西部裕固語（钟进文 2007，苗东霞 2019），ウズベク語（Bodrogligeti 2003，中嶋 2015），現代ウイグル語（竹内 1991，阿依 2023）.

チュルク語の中でも多回接辞がある程度の生産性で用いられるのは，北東語群または北西語群の言語とチュヴァシ語に限られるようだ．キルギス語とアルタイ語（南方言）では，動作主の複数性を表す傾向が強いように見える．対してトゥバ語とドルガン語では一定の意味拡張も見られ，タタール語，バシキール語，チュヴァシ語では意味拡張がより顕著である．ただし 4.4 節で見た因数分解式構造は，現時点ではサハ語以外で確認できていない．

6. 近隣言語との対照（発表では大幅に簡素化）

サハ語の近隣で話される言語にも，多回接辞 (iterative) ないしはそれに類する接辞が見られることが多い．

まずモンゴル語には，衆動態と呼ばれる接辞-*tsgaa* がある．Janhunen (2012: 146) には詳しい説明がないが，Kullmann and Tserenpil (2008: 134) では文語・口語ともに使用頻度が “quite often” であり “**many people** (usually more than two) are involved in the action” と説明される（太字は原文）．山越 (2022: 264) には動作主の複数性を表す例文が挙がり，東京外国語大学言語モジュールにも Гэр гэртээ хурдан харь**цгаа**.「（それぞれの）家に早く帰りなさい」が示されている．なおモンゴル語では，動作主の複数性を表す派生接辞として相互態接辞-*ld* および共同態接辞-*lts* も別に存在する．

次にツングース語族のうちウデヘ語を見ると，風間 (2010: 236) には動作主の複数性（*ŋua-kta*「皆寝ている」）や動作対象の複数性（*asu-kta*「いくつかの服を脱ぐ」）を表す例がある．これに加えて「自動詞であれば主語の，他動詞であれば目的語の多数性」を表す「能格型」であるとの説明が見られる．

モンゴル語とウデヘ語の多回接辞（ないし類する接辞）は参与者多数性指向である．これに対し古アジア諸語やネネツ語の多回接辞には，様々な意味拡張が見られる（**意味拡張指向**と呼ぶことにする）．

まずイテリメン語では，小野 (2021: 170-171) に行為の複数性（*owa-sxen*「何度もキスする」）に加えて，反復行為（*lale-sxen*「通う」）や動作対象への影響度（*ənk'ol-sxen*「粉々に壊す」）を表す例が挙がる．興味深いことに，最後の例には「動作は 1 回でも構わない」という説明がなされている．

次にコリマ・ユカギール語では，Nagasaki (2023) に行為の複数性（*edie-t'* 'call several times'）や動作対象の複数性（*kudi-t'i* 'kill'）だけでなく，反復行為（*šube-nd'i* 'run around'）や将然「～しつつある」（*jaq-uji* 'reach', *t'em-uji* 'end'）を表す例が挙がる[9].

コリャーク語でも，Kurebito (2024: 187) には 'walk around' の訳が付されている例があり，少なくとも多回接辞が反復行為を含意しうるようである.

ネネツ語の多回接辞も "fairly productive" とされ，Nikolaeva (2014: 45) は反復行為（*ŋoxᵒl'ur-* 'to swim here and there'）を表すと見なせる例を挙げている[10].

7. まとめ

本発表ではサハ語の多回接辞について検討し，例文調査と他言語との対照から以下のことを明らかにした.

[1] サハ語の多回接辞は，基本的には行為の複数性，動作主の複数性，動作対象の複数性を表す．これに加わる含意として，反復行為，動作主の個別性，場所の複数性，大きな全体の中の各部分，動作対象の全数性，動作対象への影響度，受け手の複数性が観察される．さらには因数分解式構造（複数の出来事を 1 つの述語動詞が一括する文）もある.

[2] 多回接辞は「バラバラの行為・出来事」を一括する．この含意は，（本発表では扱う余裕がなかったが）複数の動作主の同時連携的動作を含意する相互共同接辞-(i)s とは対照的である.

[3] 多回接辞の含意と動詞の意味タイプには，一定の相関が見られる： 反復行為と移動動詞，動作対象への影響度と対象変化動詞，受け手の複数性と（広義の）授受動詞．これはおそらく通言語的な傾向である.

[4] 多回接辞が否定接辞と共起する場合，動作主の複数性または動作対象の複数性を表す（言い換えれば参与者多数性指向となる）.

[5] チュルク語族の中で，多回接辞は北東語群と北西語群である程度の生産性を持つ．キルギス語とアルタイ語（南方言）では動作主の複数性を表す傾向が強く，トゥバ語とドルガン語では一定の意味拡張も見られ，タタール語，バシキール語，チュヴァシ語では意味拡張指向がより顕著である．ただし因数分解式構造は，サハ語独自の用法であるかもしれない．述語において 3SG/3PL を義務的に標示するサハ語とチュヴァシ語とその近隣で意味拡張が見られるとすれば，数標示との関連を見いだせる.

[6] 近隣言語のうち，モンゴル語やウデヘ語の類義の接辞は参与者多数性指向である．一方で古アジア諸語やネネツ語には，意味拡張指向も見られる.

---

[9] Maslova (2003: 192-197) によれば，コリマ・ユカギール語の多回接辞にはいくつかの形式がある．dispersive と呼ばれる用法は本発表における「場所の複数」や「大きな全体の中の各部分」に近い．将然に関連して風間 (2003: 255) では，古典日本語の「つつ」に「複数主体を表す用法がある」ことが指摘されている.

[10] ただし Wagner-Nagy (2019: 534-535) を見る限りでは，同じくサモイェード諸語のガナサン語の iterative *-kə* は，単に多回性や習慣を表すようである.

多回性 (iterativity, многократность) は，従来はアスペクト (глагольный вид) の問題として扱われてきた．本発表の結論からは，動詞の意味タイプ，否定，数標示やボイスとも大きく関連することが分かった．近年の言語類型論研究における pluractionality との関係などが今後の課題である．

［図 1］ The conceptual space of pluractional constructions（Mattiola (2019: 45) より）

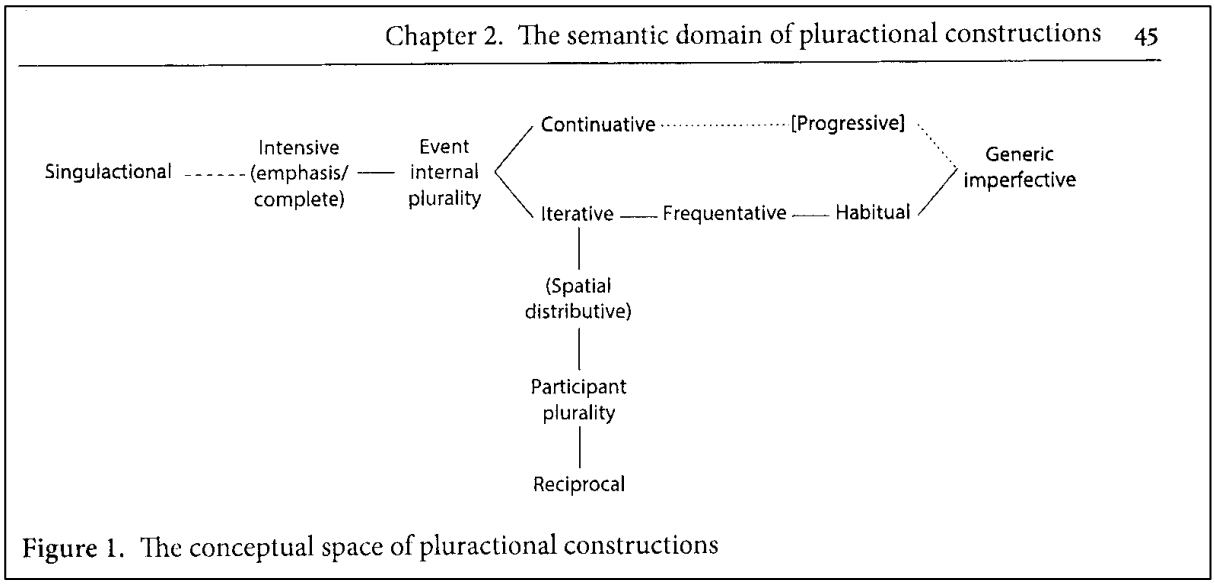

Figure 1. The conceptual space of pluractional constructions

略号

ABL: 奪格，ACC: 対格，AOR: アオリスト，COP: コピュラ，CVB: 連結副動詞，DAT: 与格，FUT: 未来，GEN: 属格，IMP: 命令法，INST: 具格，ITER: 多回接辞，LOC: 処格，NEG: 否定，N.PST: 近過去，PL: 複数，POSS: 所有接辞，PROP: proprietive，PRS: 現在，PST: 遠過去，RECP: 相互共同，R.PST: 結果過去，SEQ: 継起副動詞，SG: 単数，SML: 同時副動詞

参考文献

Anderson, Gregory David. (1998) *Xakas*. München: Lincom Europa.

Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.

Batmanov, I.A. (1940) *Grammatika kirgizskogo jazyka, III*. Frunze.

Bodrogligeti, András J. E. (2001) *A grammar of Chagatay*. München: Lincom Europa.

Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.

Böhtlingk (1851) *Über die Sprache der Jakuten. Grammatik, Text und Wörterbuch.* St. Petersburg. [Reprinted in 1963, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, vol. 35. The Hague: Mouton.]

Burbiel, Gustav. (2018) *Tatar grammar. A Grammar of the Contemporary Tatar Literary Language*. Stockholm/ Moscow: Institute for Bible Translation.

Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Däbritz, Chris Lasse. (2022) *A grammar of Dolgan. A Northern Siberian Turkic language of the Taimyr Peninsula*. Leiden: Brill.

Dedeeva, V.S. (2016) *Uroki altajskogo razgovornogo jazyka*. Gorno-Altajsk: Gorno-Altajskaja tipografija.

Dmitriev, N.K. (1948) *Grammatika baškirskogo jazyka*. Moskva: Nauka.

Dyrenkova, N.P. (1941) *Grammatika šorskogo jazyka*. Moskva/Leningrad: Nauka.

Janhunen, Juha A. (2014) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Johanson, Lars. (2022) The structure of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages* [Second Edition]. 26-59. London: Routledge.

Kullmann, Rita and Dandii-Yadamyn Tserenpil. (2008) *Mongolian grammar*. [4th revised edition]. Ulaanbaatar: ADMON.

Kurebito, Megumi. (2024) *Koryak text 1 with audio materials*. 富山大学人文学部.

Lewis, Geoffrey. (2000) *Turkish grammar*. [Second edition]. Oxford: Oxford University Press.

Maslova, Elena. (2003) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin: Mouton.

Mattiola, Simone. (2019) *Typology of pluractional constructions in the languages of the world*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Nagasaki, Iku. (2023) *Kolyma Yukaghir Texts*. 名古屋大学人文学研究科.

Nasilov, Dmitrij M., Xoršid F. Isxakova, and Valentin I.Rassadin. (1997) Expression of situational plurality in Turkic languages. Viktor S. Xrakovskij (ed.) *Typology of iterative constructions*. München/Newcastle: Lincom Europa. 203-219.

Nevskaja, I.A., et al. (eds.) (2017) *Grammatika sovremennogo altajskogo jazyka. Morfologija*. Gorno-Altajsk: NII Altaistiki.

Nikoaeva, Irina. (2014) *A grammar of Tundra Nenets*. Berlin: Mouton.

Pokrovskaja, L.A. (1964) *Grammatika gagauzskogo jazyka. Fonetika i morphologija*. Moskva: Nauka.

Poppe, Nicholas. (1964) *Bashkir manual*. Bloomington: Indiana University.

Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščenii*. Moskva: Nauka.

Ščerbak, A.M. (1981) *Očerki po sravnitel'noj morfologii tjurkskix jazykov (glagol)*. Moskva: Nauka.

Ubrjatova, E.I., et al. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.

Wagner-Nagy, Beáta. (2019) *A Grammar of Nganasan*. Leiden: Bril.

Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.

Xaritonov, L.N. (1960) *Formy glagol'nogo vida v jakutskom jazyke*. Moskva/Leningrad: Nauka.

Xrakovskij, Viktor S. (1997) Semantic types of the plurality of situations and their natural classification. Viktor S. Xrakovskij (ed.) *Typology of iterative constructions*. München/Newcastle: Lincom Europa. 3-64.

阿依 サリタナ (2023) 『ウイグル語』学術研究出版.

アクマタリエワ ジャクシルク・大﨑 紀子 (2024)『大学のキルギス語』東京外国語大学出版会.

江畑 冬生・Akmatalieva Jakshylyk (2022) 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』 新潟大学人文学部・アジア連携研究センター.

小野 智香子 (2021) 『イテリメン語文法： 動詞形態論を中心に』北海学園大学出版会.
風間 伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の 3 グループ（チュルク，モンゴル，ツングース），及び朝鮮語，日本語の文法は本当に似ているのか —対照文法の試み—」 アレキサンダー ボビン・長田 俊樹（編）『日本語系統論の現在』249-340. 国際日本文化研究センター.
風間 伸次郎 (2010) 『ウデヘ語テキスト 6』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
高島 尚生 (2024) 『ハカス語文法 2023 年度言語研修「ハカス語」テキスト 1』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
竹内 和夫 (1991) 『現代ウイグル語四週間』大学書林.
中嶋 善輝 (2013) 『カザフ語文法読本』大学書林.
中嶋 善輝 (2015) 『簡明ウズベク語文法』大阪大学出版会.
福盛 貴弘・竹内 和夫・奥 真裕 (2023) 『トルクメン語入門テキスト』大東文化大学語学教育研究所.
松長 昭 (1999) 『アゼルバイジャン語文法入門』大学書林.
山越 康裕 (2022) 『詳しくわかるモンゴル語文法［新版］』白水社.
吉村 大樹・グリエヴァ カマラ (2023) 『アゼルバイジャン語文法教本』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
苗东霞 (2019) 『甘肃肃南西部裕固语』商务印书馆.
钟进文 (2007) 『西部裕固语描写研究』民族出版社.